

歌舞伎紳士録

江戸のシティーボーイ

水落潔

歌舞伎紳士録

江戸のシテ

水落 潔

水落 潔 (みずおちきよし)

1936年大阪に生まれる。早稲田大学卒業後、毎日新聞社入社。学芸部副部長を経て、現在、学芸部編集委員。幼少の頃から歌舞伎、文楽などの古典芸能に接し、上方歌舞伎には特に造詣が深い。1970年から毎日新聞演劇評担当。著書に『とうざいとうざい』(片岡仁左衛門聞き書き・自由書館)『人形遣いの基礎知識』(国立劇場)『文楽』(新曜社)『歌舞伎淑女録・江戸のキャリアウーマン』(鎌倉書房)。

歌舞伎紳士録・江戸のシティーボーイ

一九八九年十一月一日 初版発行

著者 ——— 水落 潔

発行者 ——— 長谷川正承

発行所 ——— 株式会社 鎌倉書房

〒一六二東京都新宿区市谷左内町二一

電話(〇三)二六八一三〇六(販売部)

二六八一四五二(編集部)

印刷 ——— 株式会社精興社

製本 ——— 共同製本株式会社

© Kiyoshi Mizuochi
ISBN 4-308-00471-3

歌舞伎紳士録◆江戸のシティーボーイ 目次

歌舞伎のなかの男たち

8

市井の人びと

13

南与兵衛

双蝶々曲輪日記——継母のせつない願いに出世を捨てる

14

縮屋新助

名月八幡祭——恋の火に油をそそがれ裏切られ……

18

源蔵

菅原伝授手習鑑——せまじきものは宮仕えじゃなあ

22

長兵衛

極付幡随長兵衛——弱きを助け強きを挫く、たよりの町奴

26

孫右衛門

恋飛脚大和往来——断腸の思いで見送るわが子の後ろ姿

30

髪結新三

梅雨小袖昔八丈——活きのいい江戸前の小悪党

34

十兵衛

伊賀越道中双六——ふと心惹かれた老人は生みの親だった

38

宗五郎

新皿屋舗月雨暈——恩義ある殿さまに精一杯の涙の抗議

42

道玄

盲長屋梅加賀鳶——親切につけ入り、金をせしめる一芝居

46

団七

夏祭浪花鑑——思いこんだら命がけの男伊達

50

いがみの権太

義経千本桜——改心の代償に散った二つの命

54

木内宗吾

東山桜莊子——死を賭けた直訴の凜々しさと悲しみと

58

江戸のシティーボーイ

助六 助六由縁江戸桜——江戸のアイドル。恋人にしたい男No.1 64

笹野権三 鎗の権三重帷子——太平の世に生まれてしまった権の名手 68

治兵衛 心中天網島——七つ下りの雨は降りやまない 72

伊右衛門 東海道四谷怪談——欲望にひきずられて生きたエゴイスト 76

与三郎 与話情浮名横櫛——しがね恋の情が仇…… 80

与兵衛 女殺油地獄——親に甘え女に甘え、自分に甘えて身を破滅 84

惣七 博多小女郎波枕——快樂主義の現代つ子がおちいった甘い罠 88

徳兵衛 曾根崎心中——蓮華の台で、われとそなたは女夫星 92

勘平 仮名手本忠臣蔵——わが人生はイスカのくちばし 96

匂宮 浮舟——恋の狩人の究極の獲物 102

実力派の男たち

由良助 仮名手本忠臣蔵——冷静沈着。われらがリーダーの理想像 108

佐々木盛綱 近江源氏先陣館——智と勇の武将が情の選択 114

源五兵衛

五大力恋緋——薩摩武士をさいなむ恋の猜疑心

118

武智光秀

時桔梗出世請状——相性の悪い上司に仕えたばかりに

122

仁木弾正

伽羅先代萩——お家乗つとりを企む悪の華

126

熊谷直実

一谷嫩軍記——一枝を剪る謎かけに挑んだ武将の無常

130

園部兵衛

新薄雪物語——子の無実を信じる親たちの絶体絶命

134

政右衛門

伊賀越道中双六——非情な武士の目に光る一粒の涙

138

入鹿

妹背山婦女庭訓——面従腹背、和製マクベスの胸のうち

142

源頼家

頼朝の死——偉大な父をもつ二代目將軍の隔靴搔痒

146

景清

嬢景清八島日記——誇り高き男が知る誇りの虚しさ

150

樋口次郎

ひらかな盛衰記——復讐をうかがう勇將に千載一遇

154

梶原平三

梶原平三誓石切——歴史上の憎まれっ子が二枚目で登場

158

松王丸

菅原伝授手習鑑——政権争いにまきこまれた次男坊の悲劇

162

弁慶

勧進帳——危機一髪をくぐり抜ける智と勇氣

166

懲りないアウトサイダー

171

大倉卿

鬼一法眼三略卷——おそろべきニヒリストの告白

172

清心

花街模様薊色縫——不可思議なめぐりあわせに流されて

176

駒形茂兵衛

一本力士俵入——闇に灯るつかのまのいたわりあい

180

俊寛

平家女護島——孤愁、骨をかむ望郷と絶望と

184

五右衛門

木下蔭狭間合戦——天下盗りとはりあう天下の大泥棒

188

清玄

桜姫東文章——知的エリートをさいなむ恋のフーガ

192

狐忠信

義経千本桜——親子の情をうたいあげる乱世のメルヘン

196

河内山

天衣紛上野初花——悪に強い善にも、とうそぶく怪僧

200

元右衛門

敵討天下茶屋聚——酒にのまれて悪党の片腕に

204

法界坊

隅田川続俳——はた迷惑もともと気にせぬ執心

208

太平次

絵本合法衛——市井にひそむ善人づらの悪い奴

212

龍達

巷談宵宮雨——ケチで小ずるい生臭坊主の自業自得

216

弁天小僧

青砥稿花紅彩画——匂うようなお嬢さま……の悪企み

220

INDEX (索引)

230

装丁・デザイン 石黒紀夫

錦絵協力 国立劇場

企画・編集協力 澤木智恵子

歌舞伎紳士録

江戸のシティーボーイ

歌舞伎のなかの男たち

江戸時代に生まれ育った庶民演劇、歌舞伎。

当時の観客にとって、歌舞伎は現代劇であった。江戸時代の歌舞伎には、神代から現代（江戸時代）まで、さまざまな時代を扱った作品があるが、平安時代の話であろうと南北朝の話であろうと、江戸の観客は現代劇とみなして笑い、泣いたのである。私たちが古典劇を鑑賞するような距離をもった見方はしなかったから、平安時代の物語である「菅原伝授手習鑑」の登場人物が羽織袴の江戸風俗の衣装で出てきても、髷まげを結むすっていても、いっこうに平気だった。

一方、江戸時代には、当時の武家社会でおこったできごとを、そのまま舞台にかけることが禁じられており、作者は時代や場所を脚色する必要があった。赤穂浪士の仇討を題材にした「仮名手本忠臣蔵」のように、南北朝に時代を移し、鎌倉に場所をかえて禁制の目をくぐったのである。観客も暗黙のうちに塩治判官は浅野内匠頭えんのかみ、大星由良助は大石内蔵助おおいのぞうすけ、稲瀬川は隅田川と読みかえていた。誰もが嘘を嘘と知りつつ、芝居を楽しんでいた。そうした建前が、古い時代を借りて現代劇をつくるという歌舞伎の作劇法をとらせることにもなったのである。

しかし、どのような時代が背景になっていようと、江戸の人にとって歌舞伎は現代劇だったから、登場人物は江戸時代の道徳観や思想に準じ、江戸の現代人として考え、行動している。

では、江戸時代の道徳観や思想とは、どのようなものだったのだろうか。

ひと口でいえば「忠義」であり、「義理」であつた。

忠義とは、私を捨てて主君のために働くことである。武士は主君から扶持ふちという名の給料をもらつて暮らしている。これを、御恩ごおんという。その御恩に報いるために、武士（家来）は主君への忠義を第一の義務とし、主従は現世のみならず、前世、未来（来世）と、三世の縁で結ばれた深い関係だと考えた。

主君への忠義が大切にされたのは、それが徳川幕府を頂点に、大名、藩士とつながる封建的社會秩序を維持するために不可欠の思想だったからだ。「仮名手本忠臣蔵」や「菅原伝授手習鑑」はそうした忠義に殉じる男たちの姿を描き、熊谷直実なのおさねや佐々木盛綱もりつなといった武将たちの悲劇もここに発している。そしてこの縦社會を貫く道徳観は、家庭においては親への孝、年長者への服従、夫への貞淑というモラルとなつて人々を規制した。

武士社會の倫理は、必然的に農工商の庶民階級にも及ぶ。が、ここでは、縦の上下関係というよりも、むしろ村とか仕事仲間、売り手と買い手、あるいは親類、町内といった横のつながりを中心に、生活がなりたつていた。

忠義という武家社會の道徳観が町や村の庶民階級へ転じたとき、そこには「義理」という思想が生まれる。ひと言でいうと、社会的責任である。

そうした横の關係を重視し、義理の思想を徹底させるために、幕府は連帶責任制をしいた。村の一人が年貢が払えないときは村全体で責任をとらされたり、誰かが罪を犯すと家族や町や村の者が連座するという制度である。そのために個人の社会的責任が重大になり、社会の秩序を乱した者は集団からきびしく指弾されたのである。

しかし、いくら忠義だ義理だといつても、主君のためにわが子を身代りにして平然としていられる親が、どこの世界にしよう。罪を犯しても子は子、わが子に繩をかけてよろこぶ親がいるだろうか。人間本来の感情は思想では抑圧できない。忠義のためとはいえ子を失った親の嘆きは深く、盗みをはたらいても、わが子は常にかわいい。「恋飛脚大和往来」の孫右衛門は、公金横領を犯したわが子を、ついには逃してしまふのである。

社会のモラルはモラルとして、当事者たちは苦しみ、悩み、涙を流す。ここに時代や場所をこえた人間の情愛がある。これを「人情」とよぶ。

忠義や義理が社会制度を維持するための建前だとすれば、人情は人間の本音である。「義理人情の世界」という言葉にもみられるように、いまの人は義理と人情を同一の思想としてとらえているが、本来、両者は対立するものなのだ。歌舞伎は、こうした人間の本音と建前との相剋をつづることで庶民の共感を得て発展したのである。

しかし歌舞伎では、近代劇のように個々の人間を、リアルに表現する方法をとらなかった。理由は、俳優中心の大衆劇として発展したことにある。

その結果、幕府の規制とも相まって、女形をはじめ、様式性、色彩美、寓意性などに富んだ独

特の演劇世界が完成していくことになる。なかでも特徴的なのが「役柄」という考え方で、登場人物をその役割に応じていくつかのタイプに分類し、お姫さま、色男、悪人、生締物なまじめもの（颯爽とした武士）といったパターンでとらえるのである。

たとえば、色男の役は二枚目とよばれる役柄に集約され、顔を白く塗って和事わごとというやわらかみのある演技をする。荒事という勇壮な役は隈取りという化粧をほどこして、見得みえという様式的演技で勇壮さを誇張する。つまり、役柄に応じて化粧し、髪型、衣裳などをきめ、その姿をみただけで劇中の役割がつかめるという演出法だ。

シエクスピア作品の場合、ハムレットやマクベスはどんな化粧でどう演じようとかまわないが、源義経の場合には御大将とよばれる役柄にふさわしく、顔は白塗りにし、風姿さわやかに装う。つまり、庶民がイメージしている青年英雄の像として表現することが約束になったのである。これを俳優のがわからいうと、その役柄にみえるという演技が大切になってくる。俳優の個性が役柄の求める姿、形、声、味にふさわしいことを「仁にん」にあうというが、外見が役にふさわしくみえるかどうか芝居の成否をわけることにもなった。

だが、同じ二枚目でも「心中天網島」の治兵衛と、「世話情浮名横櫛よなせけうきよななよぐし」の与三郎はちがう。同じ生締物でも佐々木盛綱と梶原景時とはちがう。生き方、人間性がちがう。

本著では、歌舞伎本来の役柄や様式といった装飾をはずし、個々の人物に焦点をあわせ、彼らがどのように思索し、行動したのか、その素顔に近づいてみようと思う。

ここに選んだ五十人は、有名な作品に登場する男性ばかりである。原則として一作品一人、演

劇史的にも一時代一作者と、人選がたよらないように注意したが、役柄本位の役、たとえば曾我五郎、源義経といった人物は内蔵する人間像（あくまで歌舞伎作品の上で）にさしたる面白味がないので省いた。その結果、よく知られた人物がぬけていることをご了解いただきたいと思う。歌舞伎という演劇作品のなかで生き、語り、死んでいった五十人の男たち。新歌舞伎からも選んだので、すべてが江戸時代に描かれた人間像とはいえないが、こうして一堂に会してみると、その時代における人間のありようがみえてくる。ひと口に封建的人物像とたたづけてしまえない魂の叫びがきこえてくるようにも思われる。

忠義に徹したようにみえる人間の虚しい思い。悪に生きぬいた人間の陰にある時代への批判。不条理な人生を歩まざるを得なかった男の不幸……そこにみえかくれする真実には、時代をこえた普遍性も発見できる。

歌舞伎の登場人物をこのような形で紹介するのは、あまりにも現代的すぎるかも知れない。が、個という観念から歌舞伎を再見してみるのも一つの鑑賞法ではないかとも思う。

そのねらいが十全に果たせたかどうか心もとないが、一人ひとりの人生を眺めると、歌舞伎のなかの人物は、私たちと同時代人という気がしてならないのである。

市井の人びと

いづみの櫓を

上座亭
国貞入



継母のせつない願いに出世を捨てる

南与兵衛

双蝶々曲輪日記

京都郊外八幡の里の町人。のち七ヶ村の庄屋代官支配南方十次兵衛。三十歳くらいか。義母お幸、女房お早との三人暮らし。表題の八段目・引窓に登場。

与兵衛は不肖の子であつた。

父は町人とはいえこの辺り一帯の庄屋代官支配。苗字帯刀を許され、代官にかわつて村々を治める役目をあたえられていた。それなのに与兵衛はただの町人なのである。

若いときは廓のある新町に入りびたつて都という遊女と深くなじみ、そのもつれから誤つて人を殺したこともある。殺した相手がおたずね者とわかり、幸いなことに罪には問われなかった。そればかりか都と夫婦になることができ、いまではお早と本名にもどつた都、義母のお幸とつつましいが幸せに日を送っている。若いときの放蕩が嘘のようなおちついた日々である。

思えば、若いときにあれほど遊びにふけたのは、生みの母恋しさからだつたのかも知れない。幼いころ母は死に、義母のお幸は後添いとしてこの家に入った人だつた。お幸も前の夫と死別、一人っ子を手放して再婚したという複雑な過去をもっていた。他人にあずけた実の子のかわりに、心底わが子のようにかわいがってくれたが、与兵衛にはそれがわずらわしく、わざとらしく思わ